

昭和 15 年生れの私 76 歳です。終戦時まだ 5 歳、戦争の事はほとんど知りません。

ただ昭和 20 年の 2 月、父戦死の公報が入り、白木の箱だけが帰って来ました。本当に空箱だけ。この時の事は鮮明に覚えています。この事が長い間ずっと気に掛かっておりました。

最終の地はレイテ島。玉砕の地と聞かされました。気掛かりなまま自分の生活に追われて定年退職になるまで、何か借り物をしている様な落ち着かない中途半端な気持ちでした。61 歳になってレイテ島慰霊訪問団に加えていただき、父の最終の地らしき場所で小さな慰霊祭を致しました。

「こんな所に長い間放っておいてごめん」初めて号泣しました。追悼の辞がまともに読めませんでした。

その後地元の遺族会活動に加えていただき、種々の話が出る都度腹立たしい事も有り稚拙な文を書かせていただきました。

第一は、あの戦争の正式名称は『大東亜戦争』であり、『第二次世界大戦』とか『太平洋戦争』と呼ぶのは間違いであり、名称により意味あいが変わってきます。

第二は、靖国神社問題も他国の内政干渉であり、自国の為戦って亡くなった将兵に時の総理大臣が尊崇の念を表すことも出来ない歯痒さ。

第三は、間違いだらけの東京裁判。

第四は、慰安婦問題は一介の詐話作りのフィクションに大新聞が乗せられたり。

と書き出せばまだまだ色々な事象がありますが、歴史についての見方はそれぞれライトの当て方で全く逆の見え方もあると思いますがこれは私の感じた事を書きました。

最後にもっと困った事は、遺族会の会員の減少です。英霊の父母は勿論その寡婦も毎年減り続け、その子供である私達も 70 歳を過ぎているので当然かと思いますが、英霊に対する慰霊と顕彰の気持ちはこれからの時代の平和の維持に絶対欠く事が出来ない。続けることが今生きている我々の責務だと思います。

雑文で失礼いたしました。 (平成 29 年 4 月発行の静岡県遺族会報より)